深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめてみよう。

【答】「昭王」は、「王（君主）」という視点からものを見ているし、考えている。そして、その視点の目指すものは、昭王が「斉因二孤之国乱一、而襲破レ燕。孤極知二燕小不レ足二以報一。」（P一三四・3～4行目）というように、弱小燕国を強国にして斉に報復するための富国強兵にあるといえよう。また、富国強兵に必要な有能な人材の登用についても「以招二賢者一。」（P一三四・3行目）、「得二賢士一共レ国」（P一三四・3～4行目）、「今王必欲レ致レ士」（P一三五・2行目）とあり、これらの言葉もその視点からの発言であることは読み取れよう。昭王は、王（君主）として、富国強兵を目指して、ものを考えものを見ていると言えよう。

▼ポイント▲　「昭王」は「王（君主）」という視点からものを見たり考えたりしているということと、それが富国強兵につながっていることに気付かせることが大事。「本文に即して」とあるのでその根拠となる本文を示しながら、昭王のものの見方や考え方を説明させたい。昭王の言葉をこのような視点から吟味してみると、その意味するところが理解しやすくなる。また、よき人材は富国強兵策のためであり、富国強兵策は国を強くするためである。国を強くするための基本が人材招致にあるという考えは、当時の「王」（諸侯たち）の共通する考え方であり、このような時代風潮の中で「先従隗始」という逸話が生まれたことも理解させたい。「解説―戦国時代の概略―」参照。

言葉と表現の解答例

1　「先従（ゾリ）レ隗始（メヨ）」の本来の意味と、現在使われている意味の違いを調べてみよう。

【答】「先レ従レ隗始」は、本来、「賢者を招くには、まず自分のような愚かな者を優遇せよ。」という意味であったが、現在の日本ではその意味が転じて「何かを行う場合、まず言い出した人から始めなさい。」と使われている。

▼ポイント▲　国語辞書・漢和辞典やインターネット、図書館にある参考資料などを用いて調べさせる。

言語活動の解答例

1　郭隗の弁舌の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

【答】「郭隗」の「弁舌の巧みさ」とは、昭王の共感を得るための巧みな話しぶりにある。そこで、どのようにして、納得や共感を手に入れたか分析してみる。

「郭隗」は、富国強兵に必要な人材招致策の諮問を受けたとき、「死んだ名馬の骨に大金五百金を払って、一日に千里を走る天下の名馬を首尾よく三頭も手に入れることができた」という「古之君」の話を持ち出して（①「事実」）興味を持たせ、その上で、実行しやすい人材招致策（②「具体例」）を示し、その策を受け入れるよう説得する。結果、「昭王」はこの説得に共感し納得し、人材招致策を受け入れることになる。つまり、この話の「弁舌の巧みさ」は、①成功した「事実」に基づく話で昭王に興味を持たせて共感を得るための下地を作ったことと、②実行しやすい人材招致策の「具体例」を示し、共感を得たことにあるといえよう。もう少し言うなら、①の「事実」が最大の説得力を持つことは事実で、それを知って話題に用いているところに「弁舌の巧みさ」があると考えられる。②は、近くにいる自分（郭隗）を登用することから始めればよいという、実行しやすい「具体例＝人材招致策」を提示している。「具体例＝人材招致策」は、適切でわかりやすく実行しやすければしやすいほど聞き入れられやすく共感も得やすい。それを知って説得をするところに「弁舌の巧みさ」があるといえよう。さらに、この弁舌によって郭隗は、自分自身の利益をも得ている。優秀な人材を集める方法を提案するという体裁をとって、自分自身を重用させることにも成功しているのだ。

結果、昭王は郭隗の巧みな説得により、「改㆓築宮一、師㆓事之一」という具体的な行為をし、郭隗であろうとも登用するという自分（昭王）の人材登用の本気度を「説客」に示した。すると、その具体的行為に説得された「戦国の説客」たちは「士争趨燕」となった。

▼ポイント▲　ここは、グループや隣同士で、その巧みさについて話し合わせ、他の人の様々な意見や視点を聞かせ、自分の意見を作り上げさせる活動が大事となろう。そのグループでまとめた意見は、必ず全体に発表させる。その際、自グループでまとめた意見に対する他のグループからの質問や意見が出ると授業は活発化するし、深化する。

さて、指導者はこの活動の前に、場合によっては、話し合うポイントを指示してもよい。それは以下のような助言となろう。「『弁舌の巧みさ』とは、相手の共感を得るための巧みな話しぶり（説得の話術）ということ。どのような話しぶりによって、共感を得たか。」など。

（前田　康晴）